

---

# 鈴と残り少ない命の双子の妹

梨音

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

鈴と残り少ない命の双子の妹

### 【Zコード】

Z0159Y

### 【作者名】

梨音

### 【あらすじ】

鈴には双子の妹がいた。性格は鈴よりもやんちゃで問題児だった。その子の名前は美音。

意味は美しい音。

鈴と合わせて鈴の音は美しい音色と意味。

いつもふたりは一緒にするにもどこに行くのもそして、好きな人もただ美音には違うところが一つあるそれは、日光に当たれないこと。

そんな病気など氣にしてないぐらいにいつも笑顔で笑っていた。

## 転校生はダブル幼なじみ（前書き）

思い付かでざめざめと書いてみました。  
ちよつとH口いですよ。  
それでは本編どうぞ。

## 転校生はダブル幼なじみ

翌朝のクラスではある話題で持ちきりになっていた。

「ねえ、織斑君。転校生の話聞いた？」

「転校生？ 今時期に？」

入学式が終わって1ヶ月も満たない時期に転校生って事は……。

「このセシリア・オルコットの存在を危ぶんでの転入かしら？」

我がクラスの代表候補生セシリア・オルコットはいつものように腰に手を当てて登場。

「つひのクラスに転入して来る訳ではないのだから関係ないだろ」

窓側の一番前にいた篝がいつの間にか俺の机の前にいた。

「少なからず代表候補生って事だよな。どんな奴なんだろうな？」

「む、気になるのか？」

「少しな」

篝は、明らか不機嫌になってしまった。  
俺、なにか悪いことでもしたかな？

「今は他の女の事を考へてる隙はないだろー。」

「た、確かに……」

来月にはクラス対抗戦がある

「そ、うー！ そうですね、一夏さん。クラス対抗戦に向けて、より実戦的な訓練をしましょう。ああ、相手ならこのわたくし、セシリア・オルコットが務めさせていただきますわ。なにせ、専用機を持つてるのはまだクラスでわたくしと一夏さんだけなのですから！」

『だけ』という部分をやけに強調されたが……まあ、確かに他のクラスメイトに頼むとなると訓練機の申請と許可、整備に丸一日はかかるてしまうから、手っ取り早く模擬対戦するならセシリアに頼るのが早い

「まあ、やれるだけやってみるか

「やれるだけでは困りますわー！ 一夏さんには勝つていただきませんとー！」

「やうだぞ。男たるものとのよつな弱氣でどうする

「織斑君が勝つとクラスみんなが幸せだよー」

セシリア、篠、クラスメイトと口々に好きなことを言ってくれる。そうは言われても、ここ最近はエスの基本操縦でつまづいていて、とてもじゃないが自信に満ちた返事はできない。

「織斑君、頑張ってねー」

「フリー・パスのためにもねー」

「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

や二のや二のと楽しそうな女子一同に俺は「おひ」「ただけ返事をする。

「その情報、古いや

ん? 教室の入り口からふと声が聞こえた。なんか、すげえ聞いたことのあるような声だが……。

「一組も専用機持ちがクラス代表になったの。そりゃ

がしゃん。

「よひ、一夏。元気してた?」

「うわー、みおん美音!」

突然机の上に降ってきた女の子は俺の顎を引き顔を見せる。

「なんで驚くんだよ。初めてを交わした中でしょ?」

「ちょっと美音ー。邪魔しないでよー。てか、初めてなんて交わしてないでしょ? うがー!」

「うるさいなー鈴。初めでは交わしたよファーストキスもねー

「てか、美音パンツが見えてるぞ！」

「見えてるじゃなくて見せてるの」

顎から手をどかして美音はスカートをパタパタと仰ぐ

「ば！ バカ！ なにやつてんだよーー？」

「一夏を興奮させてる」

俺の手をすり抜けて床に降り立つ美音はくるんと回つて鈴の元に戻る。

「自(じ)己(ご)紹介がまだだつたね。あたしは中国代表候補生の凰 美音よ。そしてこのちんちくりんのがあたしの姉の凰 鈴音同じく中国代表候補生ね」

「おい」

「なによーー？」

「ん？」

バシンッ！ 聞き返したふたりに痛烈な出席簿打撃が入った。しかも美音だけは拳骨だった。

「痛いなー。千冬」

バシンッ！

「田上には敬語を使え、そして教員を呼び捨てにするな。」  
「織斑先生と呼べ」

「す、すいません……」

「えー、良いじゃん。」

「バシンツ！」

「もうSHRの時間だ。教室に戻れ」

「は、はいっ！」

「あたしはここだし」

鈴は一組へ向かって猛ダッシュ。うん、昔のままの鈴だな。しかし  
問題は鈴じゃない。

「おい、美音。血口紹介は済んだのか？」

「一応ね。ある部分は隠したけど」

問題は鈴の双子の妹の美音だ

「やうが、なら席に付け

「はーはーい。」

そう返事をして、机に向かってくる。

「……一夏とのえりあい気持ちいこよ」

「「なつー。」」

「み、美音ー、冗談を言つくなー。」

バシンバシンバシンバシンバシンバシンバシ！

「席に着け、馬鹿ども。そして、美音。冗談は大概にしきよ  
らね」

そう言って廊下側の一番奥の角席に座る。

「お前は、起きてるより寝てる方が静かだから寝てろ。さて、SH  
Rを始めるぞ。」

そして、今日も一日Hの訓練と学習が始まる。

(あの女子は一体何なのだ……一夏とずいぶん親しそうで……し、  
しかもファーストキスまでしてるとほ)

朝の一件が気になつて、筈はなかなか授業に集中できないでいた。  
そして、ちらりと一夏と美音の方をうががう。一夏は昨日の授業での失敗を尾を引いているのか、真面目にノートを取っていて。美音の方は宣言通り寝ている。

(あの女子寝顔が可愛い)

「篠ノ之、答えは?」

「は、はーっ! ?」

突然名前を呼ばれて、篝は素つ頓狂な声を上げる。 そうだ、今は授業中。 それも山田先生ではなく織斑先生の時間だった。

「答えは?」

「……あ、聞いていませんでした……」

「ぱしーん! といい打撃音が響いた。

「仕方ない。オルコット」

「……例えばテートに誘つとか。 いえ、もっと効果的な……」

「……」

ぱしーん! ふんわりとしたブロンドの髪が、出席簿によつて圧縮された。

「美音、答え?」

「う~? ビれ?」

「これだ」

千冬姉の声で起きた美音は面を「ハシハシ」擦つて千冬姉の質問に答えた。

「お前とあいつの関係は一体何なのだー！」

「えりですかー！」

「昼休み、開口一番筆とセシリアが文句を行つてめた。

「関係つて言われてもな……」

「一夏とあたしは体の関係よ。ねえ、一夏」

「冗談はよせよ。まあ、話ならメシ食いながら聞くから。とつあえず学食に行こうぜ」

「む……。ま、まあお前がそいつ言つなら、いいだろ？」

「あたし、お腹減ってたんだ。それに学食で鈴が待つてると困つよ

「せうか、それは急がないとな」

あいつのむやこしなと付け足して一夏たちが学食に移動した。

「待つてたわよ、一夏ー。」

「うーん、と俺たちの前に立ちふさがったのは噂の転入生、鳳鈴音だつた。ちなみに俺は略して鈴と呼んでる。

しかし変わんねーな、こいつ髪型も昔から一貫してツインテールだし。美音もそうだな、こいつは止めてないけど。

「うーんあたしなに食べようかな~?」

券売機の前で格闘している美音を見て俺は田替わりランチのボタンを押した。

「俺のと同じでいいだろ?。お前なんでも食うだろ」

「失礼ね。あたしだって好みはあるわ。まったく」

「悪かつたよ」

美音は、ぷくっと頬を膨らまして鈴を強制的にどかして食券をおばちゃんに渡した。

「なあ、美音。」

「なに?」

「お前昔に比べて可愛くなつたな」

「つな!/? 当たり前でしょ!?! あたしだって大人になつたんだから! てか、鈴には言わないわけ!?!」

「鈴も可愛くなつたけど、お前ほどではないぞ」

「なにそれ、あたし妹に負けてるわけ？」

いや、胸の大きさで負けてると思つが。

「い、一夏？ それってあたしを口説いてるのそれともお世辞？」

「うん。まあ。どっちでもないな」

「はあ。やつぱり、体まであげたつていうのに。はあー。」

「ん？」

最後の方は小さく言つて美音は口替わりランチを持つてスタスタと行つてしまつた。

「一夏、いつか美音にナイフで刺されるわよ」

鈴も物騒な事を言つて美音元に行つてしまつたので俺も追いかけた。

「美音、大丈夫なの？」

「大丈夫だと思つ

ずっとーんと沈んでいる美音鈴が優しく介抱していたところだった。

「美音つて体弱かつたけ？」

「そつでもないわ。ただ 。」

「ん？」

最後の方が聞けず聞き返したが美音は「まかした。

「なんでもない。わあ、『飯食べましょ』。」

「まあ、わうだな」

「アンタクラス代表になつたんだって？」

「おう、成り行きでな。そんないとよつお前たちこいつ代表候補生になつたんだ？」

「あたし本当は、なるつむりなんてなかつたのよ」

鯖の塩焼きの骨をほぐしていた美音がぼそっと呟いた。

「じゃあなんで？」

「なんだつて。アンタに会いたかつたからよ」

「み、美音ー？ 変なこと言つなよ確かにお前にファーストキスは奪われたけど。お前が好きなのは弾だろウ。」

「やつぱり、アンタはなんもわかっちゃいないね」

そう呟いてから美音口を開かなくなつた。ただずつと『飯を食べづけて』いる。

「鈴、美音どうしたんだよ」

「それ、あたしに訊くの？」

「いや、俺はやつぱりだから」

「一夏、体調悪くなつたから午後の授業休むから。千冬に言つて  
て」

黙つて食事をしていた美音がそう言つてトレーを持つて食堂を出て  
行つた。しかも、少量だつた食事は残つていた。

「再会の時は元気だつたのに大丈夫かな？」

「大丈夫よ。それよりさ、今日の放課後つて時間あるよね。久しづ  
りだし、どこか行こうよ。ほら、駅前のファミレスとかさ」

「あー、あそこ去年潰れたぞ」

「や、そつ……なんだ。じゃあさ、学食でもいいから。積もる話も  
あるでしょ？ 美音も連れてくるから。じゃあね、一夏」

「う、う。気持ち悪い」

ボフツとベッドに倒れる美音。

「なに？ つわり？」

「失礼ね。鈴、そんなわけないでしょ」

ドアに寄りかかる鈴を見すに美音は言ひ。

「どうだか。まあ、アンタは体があまり強くないんだから気をつけなさいよ」

「わかつてゐるわよ。まったく心配性なんだから」

「妹を心配してなにが悪いのよ」

美音が横になつてるベッドに鈴をかけて頭を撫でる

「ふふ。どうだね。」

「アンタ、食べれない魚なんて食べるかいよ」

「だつて、一夏が選んでくれたかい」

「一夏は渡さないわよ」

「鈴には無理よ。一夏は私にどういんなんだかい」

「ねえ、アンタ中学の時に一夏とやつたつて、本当なの？」

ぴくんと体を震わせる美音。

それがなんか肯定にも感じられた。

「なにいってるのよ鈴。やつたんだつたりトキてるでしょ？」

「そうね。ただの噂みたいだつたし」

「そうよ。私はその噂で一夏をいじつてるだけよ。」

「ふうん。千冬さんは知つてるけど、あんまり日光に当たるんじやないわよ」

「わかつてゐわよ」

あたしは、あんまり日光当たれない。そういう病氣だから、外に出るときは夏でも長袖長ズボンで帽子じやないと外に出れない。

知つてるのは家族と千冬だけ、後は人はなにも知らない。

「あたし授業出るから、なにかあつたらHISのプライベートチャネルで呼びなさいよ」

「はいはーい。頑張つてー」

バタンとドアが閉まり鈴は出て行く。  
やつづぶやいて、美音は眠りに入った。

「はあつ、寝る」

ざあー。

(なんの音だらう?)

ポタポタ

(水の音?)

ぴたつと額になにかが乗る。

「ん?」

「あ、悪い起こしちゃったか?」

「一夏。大丈夫だよ」

「そうか、良かった。具合どうだ?」

「うん。だいぶいいよ。ところで授業は?」

時計を見るとまだ授業は終わってない。それなのに一夏が目の前にいる。

「おひ。抜け出しあきた」

「バカ、早く戻れ」

ぽこんと一夏の頭を叩く。

「わかったよ」

「 むいじこ 」

頭をなでなでしてやる。

「 美音、お前つて昔からすぐ体調崩すけど、どこか病気なのか？」

「 セーね。いい女には秘密が多いもんよ。 」

「 セウかよ。あんまり無理すんなよ 」

「 わかりてるわよ……ねえ、一夏あの時の事覚えてる？ 」

不意に美音の声が小さくなつて弱々しく聞こえた。

「 あの時つてあれか？　お前が初めてを奪つた後に続けた言葉か？ 」

「 うん。 セウだよ 」

美音は深く息を吸つて言葉を続ける。

「 高校を卒業したら結婚する約束だよ 」

「 ああ、だから誰にもなびいてないだろ？ 」

「 その約束ね。忘れていいよ。 」

「 な、なんでだよ…？ 」

「 セーね。なんででしょ　つー… 」

いきなり口を塞がれた。

「こめわいがれる」と出来るかよ」

「い、一夏にしては強引ね」

「ウハセバ」

「一夏、続きこよ。したいんでしょ？」

美音は、起き上がり服の帯をほどく。

「美音」

「なに？ 一夏」

「俺はそんなことがしたいんじやない。お前が言つてる意味を訊いてるんだ」

「…………」

手を止めて顔を伏せる。ビックリ顔を見られないよしてこんなふうだ。

「美音」

「出でいで」

「美音ーー？」

「ここから出でいでって言ひしゆでしょーーー！」

「わ、わかったよ」

枕を投げられたので一夏は慌てて部屋の外に出て行った。

「一夏の馬鹿。私の気も知らないで……。」

バサッと布団をかぶる。

放課後、鈴が美音を起こしにきた。

「美音、生きてる?」

「死んでるー。」

布団から顔を出さずに美音は答える。

「行くわよ」

「どうした?」

「学食に」

「日光に当たり過ぎたわ。食欲がない」

「そう。じゃあ少し夜の散歩してきたり?」

「もうじよつかな」

「そもそもと布団から出で上着を羽織る。

「じゃあ、夜のお散歩行ってくれね」

「こつてらっしゃい。気をつけなきことよ」

「はいはー

ぱんつと鈴とハイタッチして別れる。

「はーー。私が唯一自由に動けるのは夜だけ、私の友達はお星様とお月様と真っ暗な闇だけね。」

IHS学園裏側に林がありそこを向かって美音は歩いてくる。

「おー、美音」

「あ、千冬さん」

林に向かう途中に千冬さんに声をかけられて振り向く。闇を纏っているみたいな黒いスースを着ていた。

「お前が珍しいな私の事をさん付けするのは、なにか合ったのか?」

「なんにもないですよ。ただ寂しくなっただけですよ」

「やうだな。IHSではお前の病気のことを知っているのは鈴と私だけ

だしな」

千冬は美音に近づきぽんと美音の頭に手を置く。

「うん。一夏には病気だからって特別優しくされるのがイヤだから絶対に言わない」

「した中だろ?」

「そんな事関係ない。それにあたし、やつ長くないしね」

長く生きて20まで短くて16まで最近は病気が安定しなくて少しの日光に当たつただけで気分が悪くなり、下手をしたら命の危機に陥る時がある。

この事は千冬以外知らない。

「そうか、長くて4年短くて……。」

「うん、もうすぐ。別に死ぬのは怖くない。だって、ちゃんと死にかけたし。」

にははつと笑う美音はどうか悲しくでもしっかりと意志を持った顔だった。

「最期かもしれない夜の散歩行つてくるね」

「私も散歩がしたくなつた。着いていこひ」

「珍しいね」

「嬉しいだろ？ 義姉と一緒に散歩は」

「千冬さん。あの話ね、なしにしてもらつたわ」

美音声のトーンが少し下がった気がした。

「諦めたのか？」

「もうじゃあ、なにけど…………。もうあたしぶつかりに縛られるのは可哀想かなつて思つてね。そしたら強引にキスされちゃつた。」

「お前がそう想つていてもあいつはそつは想つてないかもしれないぞ」

「うん、いいのただ最期の時まで近くにいられるだけでね。だからここに来たの」

そのためだけに代表候補生になつた。

鈴よりもいっぱい体を鍛えて、いっぱい勉強して。

「お前、今の田は死を恐れている田だぞ。」

「そんなことない。私は死ぬつもりでこの学園に來た」

「わかつた。最期は私が看取つてやるつ

千冬は美音の頭を撫でる。

「にはは。ありがとう、義姉。」

「なにか、飲むか？ 特別だ奢つてやるわ」

「やつたあ！ じゃあ、自販機行！」

美音は千冬の手を取つて引っ張る。

それを千冬は苦笑しながら『おつ』と答えてついて行く。  
どこか、姉妹ではなく親子に見えた。

「一夏あ！」

あたしは学食に入るなり一夏を見つけて話しかける。

「おひ、鈴。美音は？」

「体調が悪いから夜の散歩しにいったわ。」

「せつか。まあ座れよ」

「うん」

数人が座ることができたテーブルに一夏、篠、セシリ亞が一夏を挟  
るように座っていたのであたしは一夏の前側に座るようにした。

「で、なんでここからがいるわけ？」

「いいじゃねえか。食事はみんなで食つた方がうまいぞ。」

「まあ、いいわ」

ぶすつとしたかつたがやめた。

今は強敵の美音が居ないんだから、チャンスよね

「なあ、鈴。美音つて病気なのか？」

「え、さあー。あたしは知らないわ」

「本当か？」

「本当よ。てか、なんでいない人話をするのよー！」

本当にいつは美音美音つて、あー、腹立つ。ぶん殴つてやろうかしら?

「そうだな。すまん。あ、言い忘れたことがあつたぞ」

「な、なに？」

「小中学の時の友達に連絡したか？　おまえたちが帰つてきてるつて知つたら喜ぶぞ。」

「そ、そつかな？」

あんまり、いい思い出なかつたし。

美音が病氣でいつも体育を休んでいてそれでいじめが多かった。

「ん? どうした?」

「ううん。なんでもない」

「なにかあるんだつたら言えよ。力になるから」

「うん。ありがとう」

「おばさんたち元気か?」

「う、うん。元気だと思ひ。」

「ん?」

「一夏そろそろどんな関係か教えて欲しいのだが

「もしかして、うちの方ともしへは美音さんと付き合っていらっしゃるの?」

篠とセシリアが多少棘のある声で訊いてくる。

「べ、べべ、別に私は付き合つてゐる訳じや……」

「鈴は幼なじみだよ。美音はそんな感じかな」

「 「 「えー?」 「

バンッてテーブルを叩いて立ち上がる。

「な、なんだよー?」

「アンタ美音と付き合つた訳ー?」

「美音かことー?」

「う、嘘だよなー?」

3人で一夏を揺する。

「お、おー。やめろー?」

「早く言こなさこよー?」

「わ、わかったから離せー!」

離された一夏はこほんと咳払いをしてから説明を始める。

「俺と美音は付き合つてるわけじゃなくて、アイツ強がっちゃいる  
が体が弱いから支えたい守つてやりたいと、思つてるだけだよ。」

「な、なんだ。そういう事なんですねの」

「な、なんだ。そんな事が。」

「…………」

簾とセシリアは安堵の声を漏らすが鈴だけは顔を伏せている。

「鈴？」

「アンタ、それ美音に向つてないじょうね？」

「あ、ああ。言つてないが」

「やつ、ならいいわ」

ぱっと顔を上げて言葉を続ける。

「アンタ、その言葉絶対に美音に向つてじやないわよ」

「なんでだよ」

「アンタが美音の事をなんもわかつてないからよ」

「どうこいつ意味だよ」

「アンタ本当に美音の事が好きみたいね。いいわ、耳貸しなさい」

ちょこちょこと手招きで鈴は一夏を呼ぶ

一夏は頭の上にマークを浮かべながら鈴の隣に行き耳を傾ける。

「……美音は日光に当たれないのよ」

「は？」

一夏は鈴の言葉を理解できていないみたいで、マークが頭の上にたくさん出ていたが鈴はお構いなく続ける。

「……いつも厚着だつたでしょ？」

「……だからつて日光に当たれなつてなんで？」

「ああつもう。アンタは本当バカなんだからーー美音はそう言つ病気なのわかつた！！」

「つおつーーー！」

耳元で大声を怒鳴られたので一夏は耳を押されて身を引く。

「あたし帰るわ」

「ほつりとーーー」とだけ言つて学食をとつとと歩いてしまった。

「訳がわからん。」

「ほつりとーーー」と一夏が呟いた。

「ただいま。」

「おかえりーーー！」

部屋は真っ暗だったが奥のベッドに美音がいる事はすぐにわかった。

「なんで電気を付けないわけ？」

「電気はつけないでね」

「また？」

「いいじゃない。ねえ、鈴血を頂戴」

「バンパイアか」

ペシと鈴は美音の頭を軽く叩く。

「バンパイアよ。あたしはだつて毎晩は活動できないしね」

「いめんね」

「え？ なんで謝るの？」

隣に座る鈴に美音は訊いた。

「だつて、一夏に言つちやつたの美音の病氣の事」

「そう。ねえ、鈴」

「なに？」

「お月様綺麗だよ」

窓の外から田を離さなかつた美音がふとそんな事を言つて鈴もつら  
れて窓の外を見る。

「あ、本当だ」

それからしばらくふたりは窓の外を眺めていた。

「鈴」

「なに？」 美音

「私、隠してた事があるの」

「なにを？」

「あたしね……もうすぐ死ぬの」

「えー？」

鈴は驚いて美音の顔を見る美音も鈴の顔を見ていて目が交差した。

「最近ね病状が良くないのもうダメだと思ひつ。」

にははつと笑つて美音は言葉を続ける。

「だからね。鈴あたしの最期のお願い聞いてくれる？」

「えー？ ちょっと状況が飲み込めないんだけどー！？」

美音は鈴の言葉を無視して続ける。

「お願ひって程の事じゃあないんだけどね。この事は一夏には言わないでね。」

そして、鈴の肩に頭を乗せる。

「それと、あたしが死んでも泣かないでね」

「ちょっと待ちなさいよー!?」

「！」めん、眠くなっちゃった。このまま寝るね

そのままの体勢で眠りに付いた美音、ひとり取り残された鈴は、ぐるぐると頭の中でいろんなことを考えていた。

(えー!? ちょっと待つてよ。 美音が死ぬの!? なんで? 訳  
が分からぬいわ……。)

目だけで美音を見る。

涼やかな顔で寝息を立てる美音の顔がある。  
それに寄りかかるように鈴を頭を預ける。

(嬉しそうな顔で寝るなバカ。 悪んでる自分がバカみたいじゃない  
のよ)

「おやすみ。 美音」

そつとベッドに寝かせて鈴も寝間着に着替えて眠った。

## 転校生はダブル幼なじみ（後書き）

どうでしたか？

美音の設定は他の小説を書いてる時にぱっと頭に出てきて、そしたら書かずにはいられなくなつたのでつい書いてしまつた……。

まあ、それでは次回お会いましょう。

## 決戦！ クラス対抗戦！？（前書き）

一作連続で書き上げたので少しばかり微妙です。  
だけど頑張ります

あ、あと一夏のキャラが全然違いますよ。  
では本編どうぞ。

## 決戦！ クラス対抗戦！？

試合当日、第2アリーナ第1試合。組み合わせはまさかの一夏と鈴  
だつた。

「まさか、鈴と当たるとはね。」

小型モニターでリアルタイムで試合をはじめるのを待つている美音。

『それでは両者、試合を開始してください』

ピーッと鳴り響くブザー、それが切れる瞬間に一夏と鈴は動いた。  
ガギッソソッ！！

「へー、やるね。一夏もまあ、出来て当然か千冬の弟だしね

バシュウッと音を立ててピットに入る。

「なんだあれば……？」

ピットに入るとリアルタイムモニターを見ていた筈がつぶやく。

「あれは中国が開発した『衝撃砲』よ」

「美音さん」

「美音さん」

「やあ。 篠、セシリア」  
小型モニターをポケットにしまい、同じくリアルタイムモニターで試合を見る。

「さー、試合はどうなるかな?」

「美音はどうちが勝つと思ひ?」

「うーんと、一夏だね」

篠の質問に少し考えてから答えた。

「なぜですか?」

「何故って。 一夏だから」

答えになつてないのは自分でもわかつている。

ズドオオオオオンッ！！！

「な、なんだ！？」

「なんなんですか！？」

「…………」

突然大きな音と共にピットが揺れた。  
リアルタイムモニターではアリーナの中央がもくもくと煙を上げている。

「システム破損何者がアリーナの遮断シールドを貫通してきたもよ  
う」

「織斑！ 凪！ 試合は中止だ今すぐピットアリーナから脱出しろ  
！」

『いや、先生たちが来るまで俺たちで食こ止めます』

「だが……」

珍しく食い下がる千冬の肩に手が置かれる。

「千冬、一夏に任せてあげて、鈴も届るしね」

「美音」

「ござとこう時はあたしも出るからね。 山田先生、状況を教えて  
ください」

美音はやつれつと千冬から離れて、山田先生の隣に行く。

「は、はい。えっと、遮断シールドがレベル4に設定されていてし  
かも、扉がすべてロックされています。あの工事の仕業だと思います。」

「これじゃあ避難も救援にも行けないわね……」

美音は少し考えてから言葉続けた。

「システムクラックはやつてますか？」

「ええ、やつてますが、まだに解除出来ません。」

「わかりました。山田先生、セイビコしてくれますか？」

「え？」

「あたしがここから遮断シールドを解除します。」

「え、でも」

たじろぐ山田先生を無理やりどかして席に座る。

「さて、やりますか。千冬、ブック端末持つてますか？」

「あ、ああ」

ブック型端末を美音に渡した。

それを受け取った美音は素早くコードを繋いだ。

「セシリ亞、準備しといへね」

「わたりましたわ。でも本当に出来ますの？」

「ん？ 出来るよ。ウイルスぶち込めば」

ポケットから小型モニターを取り出して端末に繋げる。

「ウイルスって本当に大丈夫ですかー!? あれ篠さんはどこに?」

「大丈夫大丈夫、でもウイルスなんか使わなくとも……はい、で  
きた」

遮断シールドが解除できたみたいで画面は赤色ではなく通常の色に  
戻っている。

「さて、行くわよ。セシリ亞」

「わ、わかっていますわ!」

「美音、待て」

「なんですか?」

「出て大丈夫なのか?」

「大丈夫じゃないですよ。リミット時間は一分くらいですね」

にははつて笑つてブイサインをする。

「なら」「

「千冬さん。いかせてください」

さつきとは違う真剣な顔で言われたので千冬は黙つて頷いた。

「行くわよ。」

先にピット前の廊下に出でたセシリアと合流してアリーナまで走る。

「美音さん。凄いですね」

「なにが?」

「遮断シールドの解除に5分もたたずにやってしまつんですから」

走りながらセシリアが話かけてきた。

「あ、あれね。あたし、とある事情でひきこもりしてたからその時身に付けた物よ。」

「ひきこもり!? 美音さんが?」

「ええ、そうよ。」

「人には色々あるんですね」

アリーナの入り口に着いたふたりは同時にエスを展開した。

「セシリアのエスって『ブルー・ティアーズ』よね」

「ええ。そうですね。美音のエスはなんて言つんですか? 真っ黒ですけど」

「あたしのエスは『死神』(ハーデス)死神って意味よ」

「なんだか、凄いですわね」

引きつった笑顔で返すセシリア。

「まあ、いいからとひとつやるわよ。あたしがつっこむから援護頼むわ」

「了解ですか」

セシリアの返事を聞いて美音は武装を開く。死神が持つ鎌だが、反りがないだけ、その柄には鎖が巻かれていて鎖の先端に短刀が付いている。名前は『デスサイズ』

「なんか、武装まで凄いですわね。」

「言つとくけど、あたしのHISはHISの武装しかないわよ。」

鎌をほどき鎌をくるくると回しながら言つ。

「他の武装とか、インストールしてないんですね?」

「違う、バススロットが空いてないだけよ。なんかバススロットの処理をすべて使って『デスサイズ』を容れたみたいよ。」

「は、はあ……」

「あたしのHISは衝撃砲なんて乗つてないから射撃の方は頼んだわよ」

そう言って鎌を乱入者に投げる

「今度はなんだ！？」

「IJの鎌は……………？」

「鈴、一夏はなに遊んでるのよ。」

アリーナの入り口から青いHISと黒いHISが出てくる。  
青い方はセシリ亞、黒い方は美音。

「美音ー？」

「アンタなにしききたのよ。日光に当たれないくせに」「  
助けに来たのにその言い方は無いと思つなく鈴。それにあたし、  
1分しか日光に当たつていられないからやるわよ」

思いっきり鎖を引っ張つて乱入者の体勢を崩す。

「せりほり、もつー回あたしの鎖で踊りなさい」

今度は短刀の方を投げる

「一夏、こまよ。あんたの零落白夜で落としなさい。落とせなかつ  
たら死ね」

「なんて、暴言だ。だが、やるよー。」

一夏は雪片式型を強く握り零落白夜を発動させた。

「うおおおおおおーー。」

瞬間加速を使い一気に乱入者に近づき鎖」と切り裂く。

切り裂かれた乱入者はドンと言ひ音を立てて地上に落卜する。

「はつ、はつ、はつ。終わ

」

敵IISが再起動を確認！ 警告ー ロックされています！

「ー？」

「言ひたでしょーーーー一発で落とせと、一夏は爪が甘いんだからーーーー！」

遠くにいたはずの美音がいきなり姿を表した。  
黒い煙を纏いながら。

「死ね！」

鎌が黒く光乱入者を真つ二つに切り裂いた。

それでやっと動きが止ましたが、バタンと俺の目の前で美音が倒れた。

「美音ー？」

「美音さんー？」

「一夏ー 早く美音を木陰にーーーー！」

「...」

一 夏は美音を抱えて瞬間加速でアリーナの壁の影に美音を降ろす。

一美音！？

「ははは、一夏。ちょっと頑張り過ぎちゃった。」

「しゃべるなー。」

ISはすでに粒子となつてネックレスになつてゐる。

「あ、ヤバい。体が熱くてヒリヒリする」

手や足は赤くなっている火傷をしているみたいだ。

「とにかく、早く医務室に！」

「だ、大丈夫……だよ。氷と……冷えピタ持つてきて……」

息が荒くなり切れ切れに美音は言葉を紡ぐ。

「どこが大丈夫だーー！黙つてろ今医務室に連れてくからーー！」

一夏はガバツと美音を抱きかかえて医務室に向かつて駆ける。

「強烈な一撃……」

「口だけは元気だな！」

「それだけが…………あたしの…………とり…………。」

「ふつつりと美音の声が消える。

それは美音が意識を失った事だとすぐにわかった。

「美音ー!? しつかりしろーーー！」

だが、今の一夏にはそんな事わからない。

「おい、なんとか言えよーーー 美音ーーー！」

そういいうしている内に医務室に付き急いで美音をベッドに寝かす。

「先生、お願ひします。」

「わかりました。外に出ててくだわーーー」

「え、そばに」

「いいから外にーーー」

「はー」

一夏は食い下がるつとしたが先生に強く言われ渋々外に出た。

「美音はー？」

「ああ、鈴か……今医務室の中だ」

「やつ」

「あいつ死ぬのか?」

「わからない。でも、美音はもう残り少ない命とか言ってたわ」

「俺、本当に何も知らなかつたんだな」

ずるずると壁に寄りかかつて崩れる。

「アンタには知られたくなかったみたいよ。ずっと隠してたし」

「なんでだよ。あいつ、そんなに俺のこと信用なかつたのかよ」

ドンッと壁を叩く。

「アンタ本当鈍いわね。信用無かつたんじゃなくて好きだつたから、言わなかつたのよ。」

「好きだつたらなんで言つてくれないんだよ。」

「アンタの考えが美音にはわかつてたからよ。」

呆ながら鈴は続けた。

「考え方?」

「アンタ再会した日の夕飯の時美音事あたしなんて言つた?」

「支えたいし守りたいと言つた」

「それよ。美音は普通に接して欲しかったんだと思うわ。病気だからって特別扱いして欲しくなかつたのよ。アンタは絶対にそういう事するから」

「…………」

一夏は黙ってしまった。確かにしそうだと思つたからだ。

「バシュツ！！」

「先生！！ 美音は！？」

医務室から出ていた先生に一夏は聞く。

「今は寝てますので面会してもいいですがお静かにお願いします。」

「

「はい」

「わかりました」

鈴と一夏はそれぞれ返事をして医務室にはいる。

カーテンで仕切られてる空間の中に美音が居るのがわかるが一夏は入ろうとしない。

「どうしたの？ 入らないの？」

「いや、どんな顔して会えばいいかわからない」

「普通に入ればいいじゃない。いつもみたいに抜けた顔でさ

「抜けた顔つて……お前なあ……」

はあつとため息を漏らりしてカーテンを開ける。  
そこには額には冷えピタ腕には汗滴をしている美音がベッドに寝て  
いる。

「一夏は見るの始めてよね。美音のこんな姿は

「あ、ああ。」

一夏は顔を伏せている。

「今日は軽い方よ

「やうなのか……。」

「ええ。一夏アンタのおかげよ。」

「えー?」

「ぱっと顔をあげる一夏。

「アンタが美音を守ってくれたからよ。ありがとう一夏」

「あ、俺はなにもしない

「まあ、いいわ。座りましょ!」

鈴は椅子を一客取り出して一夏に座りせる。

「ありがとう。鈴」

「どういたしまして」

一 夏は座り美音から田を離れない。

「ねえ 一 夏、キスしてあげようか?」

「なつー。」

ガタガタ!!

「なに焦ってるのよ」

椅子から転げ落ちた一 夏を鈴は覗き込む。

「あ、焦るだろー?」

「なんで焦るの? 美音とはじめるんでしょう?」

ずっと一 夏に顔を近づける。

「お前は、なんで好きでもない奴とキスしようとかなんて言えるんだ  
よー。」

「好きでもない奴か…………んぐつ。」

「ー?ー?ー?ー?」

一夏は状況がわかつていながキスをしている。鈴から一夏に。

「一、これは妹を助けてくれたお礼よ……。」

鈴は顔を真っ赤にしてそのまま医務室を出て行く。

「あ、あこつお礼って言つてたが……あこつファーストキスだろ?」

(き、キスしちゃった。一夏とキスしちゃった!)

医務室前の廊下で鈴は両手で頬を覆つてクネクネと身をよじつてい  
る。

(あ、どうしよう。ドキドキが止まらない!)  
バシッ!!

クネクネと身をよじつていた鈴の頭に出席簿が振り下ろされた。  
やつたのは当然千冬だ。

「いたつ……」

「なにをやつてる。凰」

「お、織斑先生……」

「美音はどうなんだ?」

「今、医務室のベッドで寝てます。」

「そうか。なら美音が覚めたらいつも飲む物でも買つてきたりずっと幸いここにあるぞ」

美音はいつも倒れるとなんか変わった炭酸水を飲む確か名前はチエなんとかだった気がするわ。

「あれが、ここもあるのね……。買つてきます。」

あたしは財布を確認してから自販機にダッシュした。

「廊下は走るな！」

「は、はーっ……！」

千冬に怒られ早歩きをして角を曲がるとダッシュした。

「やれやれ」

はあとため息を漏らして千冬は医務室に入る。

「織斑、美音の様子はどうだ？」

「千冬姉。今は寝てるよ」

「そうか、一夏全部鈴に教えてもらつたが

「ああ」

「美音は、お前の事をよく知つてただろ？ どんな性格かとか色々とな」

千冬は一夏の隣に座る。

「千冬姉は知つてたのか？」

「まあな。」

「せうか。俺そろそろ部屋に戻ります。」

「起きるまで待たないのか？」

「合わせる顔がないんです」

そつと一夏は席を立ちカーテンに手をかける

「ならば、夜こいつは散歩をする。その時に会えばいい。それまでにお前がどうしたいか考えておけ」

「わかりました」

そう言って一夏は医務室を後にした。

「あれ、一夏もひ帰るの？」

「ああ、用事を思い出したから」

医務室の前の廊下でばったり鈴と会った。手にはなんだかわからぬ飲み物が入ったペットボトルを持っていた

「そう、じゃあ明日ね

「おひ。明日な

鈴は医務室に一夏は一年寮に向かつた。

「織斑先生、美音は起きました?」

「いや、まだだ」

やつ言ひて千冬は立ち上がる。

「私は後片付けがあるから仕事に戻る。美音が田を覚ましたり、部屋に戻つていいぞ」

「わかりました。」

そつ言い残して千冬は医務室から出て行つた。

それから数分後。

「……ん? ふあ~」

「起きた? 美音」

「うん、てかまだあたし死ななかつたんだ。」

体を起こして背伸びをする。

「バカな事言わないの。ほら、これ」

先ほど買つた炭酸水を渡す。

「お～、これこれ。倒れた後のこれがいいんだよね」

「あんまり倒れないでよね。本当」

「はいはい……ふはあ～。美味しい」

「よくこれ飲むわね。

なんかあたしは嫌だ」

「せう? 美味しいの?」

そして、飲み干す。

「鈴なにか良いことあったの?」

「な、なによ急にー?」

「だつて、雰囲気が違うから。もしかして一夏とキスしたとか?」

「.....」

「いつ、変なところで鋭いんだからーー

「鈴?」

「そんなわけないでしょー?」

「やうだよね。そろそろ帰りつか

「ええ」

美音はベッドから降りて鈴と並んで部屋に戻った。

学園の地下50メートル。そこにはレベル4権限を持つ関係者しか入れない、隠された空間だった。

機能停止したIISはすぐさまそこへと運び込まれ、解析が開始された。それから2時間、千冬は何度もアリーナでの戦闘映像を繰り返し見ている。

「.....」

室内は薄暗く、ディスプレイの光で照らされた千冬の顔は、ひどく冷たいものだった。

「織斑先生？」

ディスプレイに割り込みでウインドウが開く。ドアのカメラから送られてきたそれには、ブック型端末を持った真耶が映っていた。

「どうぞ」

許可をもらつてドアが開くと、真耶はいつもよりも幾分きびきびとした動作で入室した。

「あのIISの解析結果が出ましたよ」

「ああ。どうだった

「はい。あれは 無人機です」

世界中で開発が進むIISの、そのまだ完成していない技術。遠隔操作と独立稼働。そのどちらか、あるいは両方の技術がある謎のIISに使われている。その事実は、すぐさま学園関係者全員に箇口令が敷かれるほどだった。

「どのような方法で動いていたかは不明です。美音さんの最後の攻撃で機能中枢が焼き切っていました。修復も、おそらく無理かと」

「コアはどうだった?」

「……それが、登録されていないコアでした」

「そうか

やはりな、と続ける。どこか確信じみた発言をする千冬に、真耶は怪訝そうな顔をする。

「何か心当たりがあるんですか?」

「いや、ない。今はまだ な」

そう言つて千冬はまたディスプレイの映像に視線を戻す。それは教師の顔ではなく、戦士の顔に近かつた。

かつて世界最高位の座にあった、伝説の操縦者。その現役時代を思わせる鋭い瞳は、ただただ映像を見つめ続けていた。

「はあ～。一夏に知られちゃったなあたしの病氣のこと……。」

ため息を漏らしながら夜の学園を歩く。

「それにしても何でだろ？　あのYUが無人機だつて瞬間にわかつたんだよね」

アリーナに出た時なぜか無人機だと感覚でわかったのだ。

「よ、よつ。美音」

「あ、一夏」

林に通じる道で一夏が待っていた。

「なんでこそこそとこ隠れるの？」

「千冬姉が美音はいつも夜散歩するって言つてたから。会こに来た」

「一夏……。あたしも会いたかった。本当はあのまま死ぬんじゃないかって思っちゃつたら急に怖くなつたの……死ぬ覚悟は出来てたつもりなのにね」

「死ぬのはみんな怖いんだよ。いくら覚悟が出来ていてもな」

「ねえ一夏……キスして」

一 夏の前に立ち顔を突き出す。

「言わねなくても」

一 夏は美音の顔に近づきキスをする。

「……あつ……一 夏ダメ変なとこ触んなことよ。」

「良こだわつへ..」

「あつ、だ、ダメ。」、「うんなどうひどい。」

「感じてる癖」

「あつ、ハ、ひぬわい。感じてなんかないもん。」

ストンと地面に座り込む。

「感じてるんじゃあないかよ」

「うつ……うつ、うるさい」

美音はぱつこと横を向く。だけど、その顔は赤く照れているよつだ。

「俺の事嫌いか?」

「嫌いじゃこなご……」

「なり、ここだわつへ..」

「ダメっあつ、ああつ」

無理やり立たせて服の下に手を入れる。

「こや、ダメだつてー。」

「もうやめろ」と出てなこな

「こや、ちゅうとこんなといひで脱がさないでよ

「いわん、我慢出来ない。美音も我慢出来ないだらつ。こんなこ濡らして」

クチャと音がなる。

「あつああつ。こ、一夏のバカ……」

「本当口だけは達者だな……してこよな？」の前から誘つてゐる  
んだしね

「…………こ、あああこせ

「じゅあび」がここんだよ

「……自分で考へりー。口バカ一夏ー。」

そう言つて服を直して寮に向かつて歩き始める。

「お、おー。美音ー?」

「空気が読めない男は火にあぶられて死ね。」

そう言い残して歩きはつていった。

「相変わらずひどいな美音は。あの時はよかつたのに」

せつしふやいて一夏は追いかけようとしたがやめた。  
空気を読むために。

「本当一夏は空気読めないんだから。女の子がいやつて言つても押し切るのが男なのによつたく。」  
ふつふつと言いながら寮に向かつて歩く

「なによ。『じゃあどじがいいんだよ』よ。まつたく押し切りなさいよ期待してたのに」

その後の流れを想像したのか美音はボッと赤くなる。

「うう……。一夏のバカ。あそこ以外に2人つきりになれるところなんてないのに……。」

ふと、足を止めた。

「もう残り少ないので、この一冊……でか、追つてしまなさいよねー。本当に空氣読めないは、もうかえって寝るー。」

そしてまた足を動かして部屋に戻つてすぐに寝た。  
一夏が恋しくなつてしまつ前に。

## 決戦！ クラス対抗戦！？（後書き）

一夏のキャラがwww  
弾に似てきた……。

少しエロいけどそのままヒートアップしていく感じになります。

では、次回にお会いしましょう

## 転校生はプロンド貴公子

「嘘をつくのはよいか」  
「嘘をつくのはよいか」

「「「「おはよひ」やむこめあ」「」「」

朝、山田先生のS H Rで始まった。

「今日は転校生を紹介します。」

ざわざわとクラス中が沸く。

「お静かに！－では、入ってきてください」

山田先生の言葉に促されてドアから【2人】の転校生は入ってきた。  
だがそれ以上に問題は1人が男だからだ。

「シャルル・デュノアです。よろしくお願いします

「お、男？」

「はい。しかし僕と同じ境遇の人居ると聞いてフランスから留学してきました。」

シユタ

「ふうん。そなたあたしは凰 美音よ。よろしく」

あたしは一番奥の廊下側からジャンプして転校生のシャルル・デュノア君の前に降り立つ。シャルル・デュノア君は少し驚いたけど笑顔で返してくれた。

「よろしくね。凰さん」

「あ、あたしの事は美音でお願いね。一組にあたしの姉が居るから」

「わかつたよ。美音さん」

「どうでシャルル・デュノア君聞いていいかな?」

わざわざから疑問に思っていた事を切り出す。

「なにかな?」

「君って本当に男?」

「や、そうだよ」

びくんと身体を振るわせるシャルル・デュノア君

「ふ~ん。まあ、いいや。良かったらあたしのせ」

「バシン!..」

「いた!..」

「変な」と口走るな美音」

「はあい。ナタ」

叩かれた箇所を撫でてシャルル・デュノア君の隣に居る銀髪の女の子を見る。

「で、君は？」

「…………」

ちうつとあたしを見るだけでなにも言葉を発しない。

「ラウラ。挨拶しろ」

「はー。教官」

「ヒヒではそう呼ぶな。私はもつ教官ではないしあ前は一般生徒だ。  
私の事は織斑先生と呼べ」

「了解しました。ラウラ・ボーテヴィッヒだ」

シーンと静まり返る。

「い、以上ですか？」

「以上だ」

そして田の席に座っている。一夏に田についた。

スタスターと近づき

「貴様……」

「や、りせないよ」

振り上げた腕を美音が掴む。

「あたしの田那（一夏）になにするの？..」

「フン」

そしてまたスタスターと自分の席に座る。

「え、えーっと……」

「山田先生。続きを」

「あ、はい。えーっと今日はEISの起動訓練をしますのでEISスイツを着て運動場に集合してください」

「「「「はい」」」

「あ、シャルル・デュノアですよ」

「挨拶は後でいい。今から女子が着替え始めるからでござぞ」

一夏はシャルル・デュノア君の手を引いて教室を出た。

「さて、あたしは見学つと」

「待て、 美音」

「なんですかあ？」

「新しいEISスーツだ」

「ぶー。要らない」

「いいから着てみろ」

「はあー」

美音は千冬から新しいEISスーツを受け取り着替え始める。

「わーあ。 美音ちゃんの肌綺麗」

「真っ白だ。 妖精みたい」

「みんな大袈裟だよー」

美音はそう返してEISスーツを着る。

「なにこれ着にくい……」

両手両足は手首足首まですっぽりと覆われていて出でているのは顔と手と足だけだ。

「えいだ？」

「えいだって。着こへー」

「だらうな」

「だらうなつて千冬ー?」

「でもそれで当分は動けるだらう」

耳元で千冬が囁く。

「まあ、確かにやうですけど……」

そんなこんなで第一「グラウンド」。

あたしはみんなから離れた日陰にいる。

「太陽なんて嫌い」

今田はちゅうと田に当たつただけで肌が赤くなつた。

「まつたぐ。なんであたしがここにいるんだか」

普通だつたら。教室でお休みしてゐるのに

「美音……」Uを展開していつに来たれい

「はあーー」

IIS（死神）を展開してもりおひ。美音と鈴音

「今から戦闘を実演してもりおひ。美音と鈴音」

「なぜあたしまでー?」

鈴千冬の気まぐれだから仕方ないよ。

「鈴あきらめ」

ブンブンとあたしは武装の鎌を回す。

「ちよ、美音ーー。危ないからやめなさいーー。」

「うーじょうぶよ」

「それを言つなら大丈夫ね。てかあんた頭でも打つたの  
で、千冬。相手は?」

鈴の話をスルーして千冬に振る。

「今に来る」

キュイイイイイイーー!-

「なにこの音はー?」

「ど、退いてくださいーー!-」

「一夏ーー!」

バシュと鎌を投げて捕まえて自分の方に引き寄せる。

わざわざまで一夏がいた場所には山田先生が転がつている。

「一夏大丈夫?」

「おう。美音助けてくれてサンキューな」

「こはは。一夏を助けるのは当然だよ」

「ヤレ……こりやつくな……。」

離れていた鈴の怒鳴り声が聞こえる。

「一夏。鈴がひがんでるよ」

「そう言われてもな……」

「いのへタレ一夏」

「くタレば良くな」

「いわれば良このよ」

そう言つてあたしは一夏に顔を近づかる

「バシバシ……」

「場所を考える。馬鹿者」

「いや、諦めて貰おうかなって思つてね。みんなに」

「いいから場所を考えろ」

「はいはい」

千冬は、はあとため息をついて言葉を紡ぐ。

「山田先生と模擬戦闘をしてもらう。準備はいいか?」

1029

「いや、一人係はちょっと」

一大丈夫だ今のおまえらならすぐに負ける。

一  
む  
ニ  
！

鈴は千冬の言い方がカソに障ったのかムスッとした顔をする。

「はあ、わたしは教室で寝ていたいのだけどな

一  
でせ、  
せづぬ。」

号令と同時に鈴は飛翔する。それを目で一度確認してから、山田先生も空中へと躍り出た。ただ一人地上に居る美音は鎌を振り回している

「わたくし、どうしたがりかな」

ブンブンと鎌を回している美音。

「投げる事にしよう」

そう言つて鎌を山田先生に投げる。

「はつ」

山田先生は短く吐いて交わす。

「もりいー」

その隙を見逃さずに鈴の斬切りが入る。

「はい」

ひょいつと鈴の斬切りを交わす。

「チツ」

「大丈夫よ」

地上にいた美音が山田先生の後ろにいた。  
あの時と同じ様に黒い煙を纏つて。

「え」

「先生の負けです」

鎌を振り下ろす。

「山田先生。相手が悪かつたな」

先ほどの試合に負けてしまっている山田先生を千冬が慰めている。

「よせん私なんて……」

「勝つちゃいけなかつたのかな?」

「いや。お前なら勝てる当然だろ!」

「やつなんですか?」

山田先生のしきげ具合を見ると勝つちゃいけなかつたみたいに感じる。

「まあ、いい。それではグループでEISの起動と歩行訓練をしてる。グループリーダーは各班の専用機持ちがしる。ただし、美音は数に入れるなよ。」

「「「「はい」」」

元気よく返事をする一一組の生徒達。

「あたしはそもそも日陰に戻らないと」

「大丈夫か美音」

「大丈夫よ。一夏」

ひらひらと手を振つてさつきいた日陰に戻り工の解除する。

「疲れた……。」

体操座りで呟いて空を見上げる

「教室に戻ろ……それに居心地悪いし」

遠くに居る一一組の生徒達がこっちを見ながら喋つてゐる。

「どに行つても変わらないか

小学校に入る前に発病したこの病氣はそれ以来人間関係をぐちゃぐちゃにした。一番最初は自分で抱えて自殺未遂もした。それから鈴や両親に支えられて此処までこれた。けれど他人はわかってくれない。わかつていても理解はしてくれないので。

「もついや。こんな生活」

立ち上がりつてそのまま校舎には向かわず寮に向かった。

「馴れていても辛いな…………。」

IISースのまま布団に潜つた美音は……泣いていた。

「学園辞めたいな…………もうどうでもいいよ残り少ない命なんだしどうだ？」

それから美音は声を殺していつものように泣いた誰にも聴かれずに誰にも知られずに。この気持ちが分かるのは自分だけ、鈴や一夏そして千冬には絶対にわからない事だ。それから数時間。

「グスン…………久しぶりに泣いたわ…………すつきりはしないけど」

いつもそうだ。泣いてもすつきりしない。いつももやもやが心の中に残っていて消えない。

「服取りに行かないと…………もつ授業終わつてると思つ」

そう言つてじりじりと田をくずす部屋を出た。

「えー？」

部屋の前にいた人物に田を疑つたそこには

「い、一夏」

「おう。鈴に頼まれて服渡しに来た 美音っ目、赤いぞ」

そこには紙袋を下げる一夏がいた。

「ありがとう。ちょうど取りに行っていたのよ」

一夏から紙袋を受け取り元、奪い取つて部屋に入ろうとする美音の腕を一夏は掴む。

「美音、どうしたんだよ。目、赤いぞ。見せてみろよ」

「なんでもないから、離して」

「いいから見せろ」

「いいから、離して……。」

いきなりの大声にびくんと身を震わせる一夏だがその腕は離さなかつた。

「なんなんだよ！　俺はそんなに頼りないのかよ！」

「違う……　ただ話したって理解なんてしてくれないだけよ……。」

いくら病気の事を知つていたつてあたしの気持ちなんてわかりはない。

「理解つてお前の病気の事だらう？　俺は理解してる。だからお前を支えるため」

「バシンツー！」

「支えるなんて一度と言わないで……。どうせ出来もしないんだか

「…」

バタンッ!!

美音は一夏の腕を振り払いドアを思いつきり閉める。ついでに施錠もする。

「おい、なんなんだよ!? 急に!」

「つるむせい…! しゃべるな!! この部屋に近づくなそしてあたしにも近づくな!! 一夏なんて大芝ツツツツ嫌い…!」

「なんなんだよまつたく」

これ以上の追及をやめて一夏は部屋に戻った。

「一夏のバカ……」

家の両親も支えると言いながら離婚して【あたしを押し付けあっていた】だから美音や鈴は出来もしない約束はしたくない。ましてや、病気のことは一番嫌だ。

「誰もわかつてくれないわよね……鈴だつてわからないのだから他人なんてなおさりよね」

自分のベッドに座り確信の持つたつぶやきをする。

「一夏に強く当たつちゃつたな……もうびりでもこいや。死にた  
い」

そう言つてふらつと立ち上がり引き出しを開けてあるもの出す。  
それはカッターナイフだ。

カリカリカリカリカリカリ

カッターナイフの刃を出して手首に当てる。その手首には切り傷が  
たくさんある。

「ちょっと美音ー？　なにやつてるのよー？」

「…………あ、鈴」

「やめなさいー！」

鈴は美音のカッターナイフを持つ手を掴む。

「鈴離して、あたし生きていくの疲れちゃったから死にたいの」

「なに言つてゐるのよー？　いいからこれがあたしに渡しなさいー。」

「いやあ…………」

鈴が掴んだ手の上から美音は掴む。そして自分の方に引っ張る鈴も  
負けじと引っ張る。そして…………。

「つ痛いー！」

案の定鈴はカッターナイフの刃で切ってしまった。

「大丈夫鈴！」

カッターナイフを捨てて匣に近づく。

「『』『』めん……鈴」

鈴の前に崩れる美音。 鈴は手のひらから血が流れている。

「いいから……包帯持ってきて……」

脂汗をかいて止血をしている。

「わ、わかった！」

ばたばたと引き出しを開けて包帯を取り出す。

「ほら、貸して」

「うん」

鈴の手のひらを止血するようにきつくる。

「つまいまいわね」

「経験者ですから」

手首の傷リストカットを見せる。

「『返り』ことあざられなくて本当に」ゐるね

「どうせ、誰もあたしの事なんてビビりでもここによ。……はー、で  
れた。」

「ビビりでもよくなじわよーー。」

「でも、あたしの氣持ちはわからないでしょ？ あたしが鈴の氣持  
ちがわからなこよひ」

「…………」

包帯を片付けて鈴の隣に座り地面に落ちてこる血を拭ぐ。

「あたしなんで一夏の事が好きなんだろひ？ その前に好きってな  
に？ 愛つてなに？」

「そんなものあたしにだつてわからなじわよ」

「わうだね……。ペニッ」

手について血を舐める。

「あんた……」

「血つて美味しいのよ」

「やめなさい」

「あたしは夜の住人。ねえ鈴、血を頂戴」「

美音は身を乗り出して鈴に迫る。

「え、ちよつとい……」

「ふつ、[冗談]よ」

ふうーって胸を撫で下ろす鈴

わわわわ。

「ちよつとい、美音ー? なによ急に」

「少しだけでいいから抱きつかせて、お願ひねえぢやん」

いつも強気の美音にしてはおかしな言動であり行動だった

「じりしたのよ、こつものあんたらしくないぢやない」

「じりもしないわよ」

「せつときの授業の事は氣にしないのよ」

「そんなんぢやないわ、ただなんとなく」

「嘘ね。あんたは嘘つぐのが下手だもん。」

「嘘じや あないもん。ただ……」

美音はぎゅっと鈴の胸に顔を押し付けてうずめる。

「ただ?」

「1人になる事が今更怖くなつただけよ」

美音は鈴の背中に回していた腕をぎゅっと締める

「大丈夫よ。美音は1人じや あないわよ」

「ありがとう。鈴……」

「お礼なんて いらないわよ」

そつと頭を撫でる鈴。

「だけど、あたしは1人なのよ。いつもどんな時でもね。夜しか行動出来ないのだから」

そう、あたしは夜じや あないと行動が制限される。昔は違つたが今はそうなつてしまつたのだ。

「そうね。それでも1人なんて言わないでよ。悲しくなつちゃうから」

「私、鈴が好き……一夏も好きだけど鈴も好き」

押し殺していた感情が一気に吹き出す。

「それって……恋愛対象として？」

「あたしもよくわからないの……他の兄姉とは違うのは確かよ」  
顔をあげて鈴を望みこむその顔は焦りが見えていた。そして引いていた。

「やつぱりか……」

ぼそりと呟いて鈴から離れる。

「美音？ 今なんて？」

「冗談よつて言つたのよ」

(やつぱり、あたしの気持ちや感情を理解してくれるのはあいつだけね……今はもう大嫌いだけど)

そう心の中で思ひながらベッドに潜り込む。

「今日せもつ寝るから」

「午後の授業はー？」

「でるわけないでしょ？ だるいし」

「また……わかった。報せとくわ」

そう言って鈴は部屋を出た。

「空也。  
クウヤ  
……」

美音の唯一の理解者であり美音の初恋の相手だ。ぼそりと呟いた名前は誰も聞かれずに消えた。

## またまた転校生ー！？（前書き）

さて、お待たせしました。  
あまり口くないです。どうぞ

# またまた転校生！？

「えーとですね…… 今日もまた転校生を紹介します……」

「え……」

「えええええええええつー?」

つい先週2人の転校生を迎えたのにまた転校生が来たのだから驚くのは当たり前か。

「失礼します」

クラスに入ってきた転校生を見て、あたしは持っていたシャーフペンを落とした。そしてクラス全員のざわめきがぴたりと止まった。それりや そうだつて。

「秀榮 空也（ショウルン クウヤ）です。どうぞよろしくお願ひおもてます」

「な、なんであんたが

あたしはつい立ち上がり聞いてしまった。

「僕もISが起動できたからだよ。美音」

「腰でしょ……」

「なんで嘘を言わないといけないのかな？ 僕のハニー」

「キモ、あたしを呼ぶなこのたらじがーー！」

あたしは寒気がして身震いがした  
なんでこんな奴に初恋をあげたのだろうかあー……あたしの黒歴史  
が……。

「な、たらしとはひどいな。純粋に女の子が好きだけだよ」

鈴は知らないがこいつは極度の女好きだ。知っているのはあたしだけ  
ただけど、あたしのことを理解してくれてるのもこいつだけだ。複  
雑な気分だわほんと。

「千冬！…… ここつを追い出しつ…… ここつがいたら学園の女子  
が襲われるわよ」

教員までと付け足す。

「考えておく。美音ちゃんそろ時間だぞ」

千冬は壁掛けの時計を見てあたしに知らせる。

「あ、ほんとだ。」

腕時計を見てあたしは頷く。

「じゃあ今日も早退でようしぐ。あと、ここつの部屋を絶対にあた  
しか一夏の部屋にしてよね。じゃないとその子襲われるから」

あたしは千冬にせり言ひ残して教室を出た。

「千冬姉」

「バシンツー！」

「織斑先生と呼べ」

「はい。それで美音どー行くんだ？」

美音がでたあと一夏は千冬に聞いた。その言葉を聞いて空也が反応した。

「君が織斑一夏か美音のことなにも知らないんだね。いいよ。教えてあげるよ」

空也は一夏の前に立ち言葉を続ける。

「美音は今日は病院に行つたんだよ。定期検診つてやつだ」

「へー、そなのか。」

一夏は空也の言葉を聞いて納得したのか手を叩いた。

「君は美音の病気の事を知つてるのか？」

「当たり前だ、あいつとつき合つてるみたいな俺が知らないでどうするんだよ」

「み、美音の彼氏…………だと……」

「彼氏じゃねえよ。みたいな者だよ」

肘をついて一夏はそう言った。美音との約束だからだ。

「わうかそうか、ならば奪つても構わないな」

「出来るものならな。てか、早く席に戻れよ」

空也の後ろには千冬が構えていた。

「わかっている。」

「で、ではHRを終わりにする

そつと机に手を置き、そのまま座った。

空也が席に座ったのを確認してから千冬はそつと机に手を置いて山田先生と共に職員室に下がった。

「美音ちゃん久しぶりね」

「ええ、お久しぶりですね先生」

この病院は日本にいた時にお世話になつた病院だ。またこっちに来ると話したらあの時のように対応をしてくれると言つてくれた。

「どう? 病状は?」

「国に帰つてから悪化しました。はい。これカルテです」

バックからA4サイズの茶封筒を取り出して主治医の金山先生かねやまに渡す。

「預かりました。どれどれ」

茶封筒からカルテをだして田を通す。

「うへん。思つていた以上に悪化してゐるね。今年がピークか……」

あたしの余命は16年もつそんなに時間は無い。

「はい。そうですね」

「うへん。どうじょうか、入院は出来ないでしょ?」

「はい、今は代表候補生なんで」

「私はあまりオススメしなかつたのになつちゃうんだもん。ほんと美音ちゃんは私の言つこと訊いてくれないね」

「えへ、訊いてますよー」

「どうがよ」

「あたしは日本を死ぬ場所に考えただけですよ。代表候補生なんて

そのための口実に過ぎませんよ  
そり、死ぬなら日本で死にたい。一夏や千冬さんに看取られたいから。

「ほんと美音ちゃんは強いわね。じゃあ仕方ない精密検査してそれに応じた薬を出すわね」

先生は机にむき直して書き始める。

「薬なんであるの?」

「体内の火傷を抑える薬ならね」

そう言つてカルテと共に看護婦さんに書類を渡す。

「じゃあ検査室行こつか」

「はい」

あたしは先生に連れられて診察室に入る。

「じゃあまずは血液検査からね」

「はあーー」

腕を出して注射をまつ。

「じゃあ少しチクツึとするよー」

と言ひながらブスツと刺す。

「ちよ、先生」

「はい終」

「あたしこれだけは好きになれないわ」

「泣き言、言わないの」

「先生が下手なんだけどね…………。」

「はいはい。」

「じやあ聽診器当てるから服捲つて」

「先生、また順番逆だよ」

「大丈夫よ。ほら、服捲つて」

「え~」

「なによ、え~って同じ女でしょ？ それとも彼氏にしか見せたくないの？」

「先生は一いや一いやしながら言ひ

「そうですよーだ」

「確か一夏君だっけ？」

「そうよ……先生も早く作つたうへ。」

「わ、私にもいるわよ」

あ、この方に方はいないわね。

「ほら、いいから捲りなさい」

「はいはい」

「うへん。当分運動禁止よ。あと、あまり日光には当たらないことね」

聴診器を外して机に置いた先生がそう言ひ。

「日光に当たらないのは元からでしょ？」

最近当たり過ぎてるけどね。

「やうよ、最近当たってるでしょ？」

「バレました？」

「病状診ればわかります。心臓があまり元気じゃないから運動禁止、そして日光は当分ダメ。イコール、学園はお休みしなさい」

「了解しました」

まさか」「つなるとわな思わなかつたわ。

「よひしご。じやあ血液検査の結果が出ぬまぢ待合室で待つてね。

」

「了解」

あたしは先生に一礼して診察室を出て待合室のソファに座る。

「ん？ あ、可愛いー」

待合室に座っているあたしから見て左前に赤ちゃんを抱っこしていた若いお母さんがあった。

「あ、あの、抱っこされてもいいですか？」

「ええ、良いわよ」

「やつた」

抱っこしてこた赤ちゃんをお母さんはあたしに抱かせてくれた。

「お姉ちゃんは子供好き？」

「はい、大好きです。あたしも早く子供産みたいな～」

「子供なんて大変なだけよ」

「やうなんですか～。」

「セツよ。夜泣きはするはなにやらで、それまでだつてお腹は大きくなつて足元見えなくて大変んなのよ」

あたしがお母さんの話を聞いていり。

「お大事に」

「じりも」

診察室からお母さんへらこの若い男性が腕に包帯をして出しました。

「じりだつた?」

「じばりへ[女]静だつて」

出てきたのを氣づいてお母さんは男性に近づいた。それで気づいた、あの男性はお母さんの旦那さんだつて。

「赤ちゃん抱かせてくれてありがと'う」やれこめす

「いえいえ。じゃあな」

「はい。お大事に」

「あー、子供可愛いにな~ちつちゃい子大好き。子供ほしいな~」

ボスッとソファに腰を降ろす。

「作つちやおうかな? あー……。でも産めるかわからないからや

「あ

「お、なんだ? やけにマイナス思考だな

「出たねやぶ医者

「誰がやぶ医者だ?」の不良娘が

「このかにもやぶ医者? こ医者は金三先生と回りへ一年前からあたしを見てくる。斎藤<sup>サイトウ</sup>先生だ。ちなみに男だ

「不良でなにが悪いわけ? やぶ医者よつままだまじょ

「この減りずら口も返りやねーな。このの

わちわちわちわちとあたしの顔を撫でる。

「ボサボサになるからやめてくれます?」

「おー、一お。」

「悪いこと悪いことでない? もう?」

「ここが悪いんだよ。おのじみの悪いやつだよ。

やつはいつてクシヒキ鏡を渡してやる。

「先生の使ひ古しじょへ。こうなこわよ

「バカいえ！ 新しいのだよ」

「誰にあげるつもつだつたのかしらね」

そいつ話をながら斎藤先生からクシと手鏡を受け取る。

「お前」やめためだよ

「は？」

なに今聞いてはならぬことを聞いた気がする。

「勘違いをするなー」これはお前の入学祝いだよ。金山先生と一緒に決めたんだよ。」「

「へー。それはどうも……といひで先生？」

「なんだよ」

ちょこちょこと手招をして先生を呼ぶ

「金山先生とは、上手くじつたの？」

「…………」

「いってないんだね。ちなみに金山先生彼氏できたみたいですよ」

「なつ、なにーー。」

バシバシ

「病院では騒がない。それと美音、余分なことは言わないの」

「「はー」」

斎藤先生が騒いだと同時に頭に激痛が走った。

「ほら、美音。血液検査の結果でたわよ。ほら、診察室に入つて斎藤先生もよ」

「はあーーー」

「ああ」

金山先生の後に続きあたしたちは診察室に入った。

「えーっと、美音」

「はー?」

あたしは何気なく回転椅子でぐるぐると回っていたら金山先生がちよつと真剣な声であたしに話しかけてきた。

「あんた、妊娠してるわよ」

「は?」

「お前、あの彼氏とか!」

「ちよつと、待って! あたし確かにあいつとしたけど……中学一

年の時よー?」

確かにしたけど、その時はなにもなかつたのになぜ今頃?

「したのね……。嘘よ」

「なつ! 先生!!」

「まさかあつれつと白状するとはね」

やられたわ……。不覚

「でー! 先生病状はー!」

「あらあら、焦つちやつて」

「不良娘はいつになつても不良娘だな」

「う、うるさい! したかつたんだからしうがないぞしうーー。  
それに結婚もしてくれるとて言つてくれたしね!」

でも、結婚なんてあたしには出来ない……もうすぐ死ぬかい。

「やつはつ男ほど子供ができる途端逃げ出すのよね

私は何人も見てきたわっと金山先生は付け足した。

「俺はそんな事はしないがな」

斎藤先生は金山先生にアピールをしているが

「それが当たり前です」

金山先生に正論を言われて撃沈。

「あたしは妊娠なんてしてないでしょーー！」

「ええ。 してないわよ」

「じゃあなんでそんなに真剣な顔したのよ」

「なんとなくね。 血液検査の方は目立つた異常はなかつたわよ。」

金山先生はカルテを読みながらそつそつとカルテを看護婦さんに渡した。

「今日は帰つていいわよ。 その代わり当分は病院に来るのは一週間に一度にしてくれるかな？」

「そんな頻繁に来るの？」

「うん。 病状が悪いからね。 当分はこのままかな」

「大変だな、 美音

ポンと斎藤先生があたしの肩に手を乗せる。

「一番早い方法は入院する事だけど無理でしょー?」

「はい。でも、入院するなりあるでいいですか？」

「どうせ園はお休みしなきゃいけないしね。

「アリ。なら今すぐにも入院の手続きをしまじょつか。斎藤先生、あの病室は空こしますか？」

「ああ。空こてるだ

「じゃあそこに入れとおこしてください」

「わかった。やつておく

そつと斎藤先生は診察室を出て行った。

「じゃあ、これに書いてね。こつものよつて保護者欄は書かなくていいから」

「了解

美音は手慣れた手書きで書類を書いていく。

「出来たわ」

「ありがと。じゃあ検査入院だから3日から4日よ

「わかったわ。じゃあ病室に行くわ

入院か……。好きになれないわねこれも

「ここも変わってないわね」

ここは日本にいるとき入院したら使つお馴染みの病室だ

「ここ、景色は綺麗で日光が当たらなくていいんだよね」

カーテンを開けて窓を見るちょうど太陽は病院の後ろにある。ここは絶対に日の光が注さない病室。

「あ、鈴か千冬に電話して荷物持つてきてもらわないとね」

携帯を取り出して鈴に電話をかける。

「もしもし美音なに?」

鈴はワソコールでた。

「うーん。今日ね定期検診の日なのは知ってるよね?」

「ええ。昨日言つてたわよね。で、どうだったの?」

「えーっとね……。入院だつて」

「えー？ ほんとなのー？」

入院と訊いて鈴は大きい声を出す。

「うん。検査入院だけどね。3日から4日だつてだから、服とか持つてきてほしいのよ。頼める?」

「わかったわ。学校が終わったら行くわね。病室は?」

「いつもの病室よ」

「わかったわ」

ふつんと電話が切れる。

「さて……と」

携帯とカバンをスタンダードテーブルに置いてベッドに座る。

「やる」とはなにもないのだけどね

なにげなくあたしはお腹を触る。

「妊娠か…………してるわけないじゃん。」

お腹から手をどかして窓の景色を見る。

「少しばかり期待しちゃったじゃないのよ。先生のバカ」  
一夏とあたしの子

「 ものか！」へやんぢや な子供かもね

少し想像をして、クスリと笑う。

「 あたしも強く生きたかったな。」

まだ死んでないけどね。

「 なに、 黄昏てるの？」

「 あたしだつて 黄昏るわよ。 先生」

「 らしくないわね。 ほら、 手を出して」

「 はあーー」

金山先生に言われ腕を捲り手を出す。

「 らしくないのは先生が悪いんだよ」

「 どうしてよ」

昔ながらの血圧計に空氣をおくつながら金山先生は訊く。

「 妊娠したとか血つからよ」

「 んじめん。 美音は子供好きだったわね」

いつも子供たちと遊んでるのを金山先生と斎藤先生は知っている。

「うん。だから期待しちゃったのよ」

そしてまた、窓の外の景色を見る。

ぎゅーー

「え、先生？」

「そんな切ない顔しないでよ。」

金山先生はあたしをぎゅーっと抱きしめた。

「わかった。金山先生」

「あなたはいつも笑顔でいて。私や斎藤先生はあなたの笑顔で救われたのよ。だから絶対に笑顔を絶やさないで。泣きたい時は泣けばいいのよ、だけどね。泣き終わったら笑顔をしてね」

「はい。先生」

いつもどんな時でも笑顔でいるか……。最近心がけてないわね。

「じゃあこれに着替えてね」

金山先生はあたしを離してくれてから。今度は看護婦さんから入院服を渡してくれた。

「了解した」

そこまで訊いて金山先生は看護婦さんを連れて病室を出て行つた。

「さて、着替えますか」

美音は制服の帯をほどいてボタンを一つずつ外していく。そして露わになつた胸とそれを包むように白いブラジャーが胸を包み込んでいる。

「また、大きくなつたかも……。」

鈴の胸の大きさはAで美音がCだ。  
美音はむにゅっと胸を押し上げる。

「ま、いいや」

そう言つて入院服の上を着る。そして下をスカートを着たまま穿いてスカートを脱ぐ。

「お着替え完了」と

ベッドの布団に入る

「でもやる」とはないと

1人で受け答えをしていて痛い子だと思つが入院しているときの美音の遊びである。

「ふつ。またこんな遊びをするとはね」

「だよねー」

また一人受け答え。美音は寂しい子いつも一人。

「はあー。つまらないな」

ほんとにつまらなそうな顔して布団に潜る。

「おやすみ」

「おやすみ。美音」

そう言つて一人受け答えをして眠りについた。

「織斑先生」

「なんだ、凰」

「美音が入院しました」

「ああ、その事なら今さつき連絡が来た。」

場所はIHS学園の廊下時間は美音から電話があつてから授業を挟んだ休み時間だ。

「それで、荷物を届けてあげたいんですけど……」

「なんだ、はつきり言えー！」

歯切れの悪い鈴を千冬は少し齧る。

「はいー 美音に荷物を届けたいので次の授業抜けていいですかー！」

「ああ、行つてこい。あいつ一人で寂しいだろ？ しな

「と笑つ千冬。

「わかりました。ありがとうございます！」

「担任には私から言つておくから、早く行つてやれ

「はい。それじゃあー！」

鈴は千冬に一礼して早足で寮に戻った。

「美音が入院か……あの一人に知らせるべきか知らせないべきか……」

つと千冬は呟いた。

「こんな感じでいいわよね

一年寮の鈴と美音の部屋。

「最近、入院しなかつたけどまさかこの時期にね

今月末には学年別トーナメントがある。この時期に訓練を休むとトーナメントについていけなくなる可能性が高いのだ。

「よし、行くか。また一人受け答え遊びでもしてんのだらうしね」

見透かしたような口振りをして荷物を持って部屋をでた瞬間。

「あ

「ん?」

ドアを開けたら田の前に一夏が歩いていた。

「い、一夏!？」

「鈴か、ん? そんな荷物持つてどこ行くんだ?」

「ど、どこも行かないわよ」

手提げバックを持つてそれほどどこも行かない訳がない。案の定一夏に指摘された。

「どこもいかないって、お前なあ……そんな荷物持つてどこもいかない訳ないだろ?」

「とにかく、じゃあね」

一夏の話を無視して歩き去るつもりだったが

「待てよ。その荷物よく見たら美音のだい

一 夏は鈴の手首を掴んで止める。

「はあー。もう隠すのめんべくこから言つわね

「おひ

「美音が入院したから荷物届けるのよ。」

「美音入院！？」

「ちよっと声でかい！」

「あ、悪い。どうこう事なんだよ」

鈴がしーっと空いていた手で口に当てる。

「検査入院なのよ。ねえいつまで腕掴んでるのよ

「あ、悪い」

ぱっと一夏は鈴の腕を放す。

「で、当たり前だけ付いて来るき？」

「おひ。当たり前だ」

鈴ははあーとため息を吐いて一夏と共に病院に向かった。

「美音？　いる？」

「こーわよ。あいてるから入ってきて」

その言葉を訊いてすぐに病室のドアが開いた。

「一夏も来たの？」

「おひ。鈴に入院したって聞いたからな見舞いだ」

鈴の後ろに立った。一夏に気づいた美音は少し驚きながら一夏に訊いた。

「見舞いってまだ一日田よ」

「ふつと笑つ美音。

「さて、荷物はこんなもんでいいしょ？」

「こつも、世話をかけるの鈴には

「それはいわない約束でしょ？」

鈴はベッドに座つあたしの頭を撫でる。

「よじてよ。一夏がいるでしょ」

「なに照れてるのよ。」

「恥ずかしいもん。子供扱いされてるみたいで」

美音は頬を赤くして窓を見る。

「その行動が子供みたいよ」

「う、いのやー」

ぷくっと膨れる。

「あら、賑やかね」

不意に病室のドアから声が聞こえた。

「あ、金山先生に斎藤先生。お久しぶりです」

「ええ。久しぶりね鈴ちゃん」

「久しぶりだな鈴」

鈴の挨拶で金山先生と斎藤先生が順に挨拶した。

「お、こいつが家の娘の初めてを奪つた

ボフツー！」

「誰が娘だ！－！」のやぶ医者が－－－」

美音が思いつ切り枕を斎藤先生に投げた。

「ほんと斎藤先生は『テリカシー』がないのだから」

やれやれとした感じで両手をあげる金山先生。

「で、先生なに用？」

「点滴の時間よ」

「斎藤先生に頼みたいです」

金山先生下手くそだから痛いし…………。これはもうきを確認済みだ。

「よし、任せる」

美音の枕攻撃から復活した斎藤先生が点滴を持って美音近づく。

「ほら、手だせ」

「はいはい」

手を出したのを見て斎藤先生はゆっくりと針を刺した。

「ほら、できた」

「どうもです」

「わい、私たちが死るけど誰が過ぎなこでね」

「わかつてます」

代表して鈴が叫ぶ。

「じやあまたくるかうね

やつて先生たちは病室を出て行った。

「あ、挨拶するの忘れた

「別にいいわよ」

美音が手をひらひらと振る。

「せうか。ヒーリング。鈴に美音

「なに?」

「なに?」

上から美音に鈴

「空也って奴どどんな関係なんだ?」

「あ、確かにあいつもIS動かしたんだってね知らなかつたわ」

「あたしも、今日クラスで会つてびっくりしたわよ。で、空也とどんな関係かつてねえ……」

珍しく美音が言葉を続けることを躊躇つている。

「美音の初恋の相手よ」

「なつ！ 鈴！？ あたしが言つつもりだつたのにー。」

さらりと鈴が言つてしまつた。

「なんだ、美音の初恋の人か」

「そして、元カレよ」

「そ、それは誤解よ！ ただ一緒にいただけよー。」

美音が珍しく動搖している

「一緒にいただけってあんたね……。あんな風にくつついてたら間違えられるわよ」

「あいつが無理やりくつついたのよー。今はあんな奴大ツツツツツ  
嫌いよーー！」

そつ吐き捨ててそつぽ向くよつて窓の外の景色を見る。

「はいはい。あたしは足りない物を売店で買つてくるからー夏美音

を見ててね

「おひ。わかつた」

一夏の返答を聞いてから鈴は病室を後にした。残されたのはベッドの上で窓の外を見ている美音と離れた位置に立つている一夏だけだ。

「一夏……座つたら?」

美音は窓から田を離さずにしていた。一夏は『おひ』とだけ言ってベッドの横にある椅子に座る。

「一夏……『氣にする?』

「なにが?」

相変わらず窓の外を見ている美音唐突に訊いてきた。

「あたしの空也の関係よ」

「まあ、少しだな」

「やつ

そつ短く言つてから美音はやつといつを見た。

「あたしの空也の関係はね、確かに初恋相手よ。だけビツキ合つてた分けでもないから、あいつとはなにもなかつたわよ」

「そう言つがあいつがお前のことをハニーと呼ぶのは何故だ?」

「それはあたしが知りたいわよ」  
はあつとため息をつく。その行動は嘘偽りが無いことが確かな証拠である。

「わうか。よかつたよ」

「なにがよかつたの？」

「ん？ 美音が俺だけの物だつて」と元だよ

「あたしは物じやあ無いもん」

「わかってるよ」

そして一夏は美音にキスして押し倒す。

「ちゅうと、なにするのよー。」

「さあ？ 何をするんでしようかね~」

「ちょっと待つてよ。せめて点滴が終わるまで待つてよー。」

点滴はまだ半分ぐらい残っている。それをすべて終わるまでの時間は30分はかかる。

「」となんもんいひつかやべ

美音の腕から点滴針を抜いて点滴を止める。

「これでいいだろ?」

「いいだろ? じゃないわよ。まつたく」

はあつとため息をつく。

「だからひダメよ」

ぐいっと一夏の体を押し返す。

「なんでだよ」

「鈴が帰つて来るからよ」

「わかつたよ」

そこへやつと一夏は離してくれた。

「一夏、あんたねえ。外したのはいいけどさるのは痛いのよ。」

と言しながらブスッと点滴針を刺す。そして点滴を開始する。

「おま……。先生呼んだ方がいいだろ?...?」

「大丈夫よ。いつもやることだしね」

にっこり笑ってブイサインを作った。

「お前つてほんとすげーな……」

「……私は一夏の方が凄いと思つた」

美音がせつボソシと呟つた。

「エリがだよ」

今の一夏は一夏に聞こえたらしい聞を返された。

「すべてよ。自分よりあいてを心配するんだかい。でも、やつこつ一夏があたしは好き」

美音は顔を赤くした。それを隠すよつに布団に潜つた。

「お前わいじとまえこりとまえな」

一夏もまた、顔を赤くしてくる。

「一夏はあたしの」と好き?」

美音は布団から顔をひょっとだけだして一夏を見る。その行動を見た一夏はまたしても顔を赤くした。

「お前、いつもと雰囲気違うな」

「え? どんな風に?」

「な、なんといつか……こつもやらない行動をするしなんか可愛い」

「こつもしない行動か……ねえ一夏もつと近くに来て」

トントンといじりあわせひと合図する。

「ううでいいの むべつ……」

一夏が座り終わると同時に美音がキスをした。

「こつもしない行動はいつのものを感じのよ

またしても顔を赤くして布団に潜つた。

「や、そつだな」

「ヒルヒド一夏。あたしのこと好きだよね？」

「ああ、当たり前だ」

「やう。よかつたわ」

布団から少し顔をだして美音が言つた。

「急にビーフしたんだよ」

「ビーフもしないわよ。ヒルヒド一夏」

「おひ。なんだ」

一夏が顔を覗き込むように体を乗り出す。

「あたし、妊娠したみたい」

「は？」

顔を真っ赤にした美音が振り絞つて言葉を紡いだそれは先ほどの金山先生の「冗談だった

「さつき先生が言つてたの」

カラソ

「「「？」」」

廊下から何かが落ちる音が聞こえて2人は同時に見る。するとそこには鈴が風呂桶を落としたところだった。なぜ風呂桶？

「あ、あんた……それ本当なの……？」

見るからに動搖している。

（本当は嘘だけどもう少し続けようかしら？ それとも終わりにするか）

「な、なんとか言いなさいよー」

「鈴、病院では静かにね」

「そんなことわかつてゐるわよーーー」

(逆効果だつたか。仕方ないネタばらししますか)

「鈴妊娠は嘘よ」

「嘘なのかよー。」

今度は一夏が反応した。

「当たり前でしょバーカ。」

終わつた点滴を外して備え付けの冷蔵庫からコーラをだして一口飲む。

「ふー。鈴も一夏もいちいち驚きすぎよ。」

(だからからかうのが面白いんだよね)

「よ、よかつた~」

鈴はぺたんと床に崩れ落ちる。

「お前つてほんとはあ……」

一夏も頭を搔いて鈴を立たせた。

一夏と鈴が美音対して思つた事は昔と変わらず『小悪魔』だつた。

またまた転校生！？（後書き）

迷った結果一人目の男子をだしてしまいました。あ、シャルルを忘れてましたね。合わせて三人ですね。  
では、また次回

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0159y/>

---

鈴と残り少ない命の双子の妹

2011年11月30日16時53分発行